



予定されたテンペス
ト

長編第一作

花迫カルピン

寝てはならない。今寝たら人生が終わる。

そんな時、人は更なる睡魔に襲われる。

まるで悪魔である。睡魔が悪魔となって牙を向く。

なんでこんな時に。

今まさに彼はその悪魔化した睡魔に襲われている。

彼が運転しているのは大型の十トントラックだ。事故は許されない。それならどこかに停めて仮眠をとればいいか。

いや駄目だ。彼はついさっきまで東名高速の渋滞と長時間戦い、やっとのことで高速を降りたところなのだ。

本当ならとっくに着いているはずの荷物を抱えて目的地に急いでいる。

電話で先方に話は行っているが、今運んでいる物は重要な荷物であり、一刻も早く届ける必要があった。仮眠など取っている時間はないのだ。

しかし、人は仕事に支配されすぎているのではないか。

仕事のために人の命をおろそかにしていいものか。もう一度よく考えてみるべきかもしれない。

彼にはもう限界が来ている。ハンドルを握る手は不安定に揺れている。ふらつくトラックの軌道。

果たして、人の命の価値とは一体。それは決して測れるものではないが、きっとこんな風になくしていいものではないはずだ。

ほら、前を見ってみる。今にも彼は人を轢こうとしている。トラックのヘッドライトは若い男性を照らし出す。

そうだ、彼はそこで気付く。

目の前の男性を瞳と脳が認識して身体に信号を出す。その信号は認識後遅れて身体に伝えられる。その刹那の時差が事故を生む。

だがしかし、人は現実から目を背ける速度には長けているようだ。彼はハンドルをひねり、ブレーキを踏むよりも早く目をつむった。不快な衝撃とともにゴンッと鈍い音が響く。

今、彼の脳内では必死の搜索活動がなされている。今の衝撃で行方不明になっている自分の平凡な人生を搜索しているのだ。

つまり、無実を装う言い訳を探している。

それどころか、気付いていないフリをしようと脳は瞼を硬直させ、足を踏み込むように身体に信号を送った。トラックは現実を置いて走り出す。何も無かったようにその夜道を後にした。

そして、彼の逃走劇は始まる。一体、彼は警察から逃げ切れるのか。彼の平凡な人生はどうなるのか。君たちがこれから目にするのは仕事に支配され罪を犯してしまった言い訳男の悲しくも壮大なメロドラマである。

いや、待って欲しい。彼が主人公で本当にいいのだろうか。

出来る事なら彼みたいな卑怯な男を主人公にしたくない。もう一度、あの現場に戻ってみようじゃないか。

轢かれた若い男の子はどうなったのだろう。よく見てみると彼は制服を着ている。彼自身の血液にまみれ、容姿は分かり辛いはその制服は間違いなく、我らが旭が丘高校の制服であり、高校生だということがわかる。

そこに現れたのはただの通行人である気の強そうな女性である。

彼女はその血まみれの高校生を発見し、顔に似合わず情けない声をあげる。彼女もきっと今まで平凡な人生を送ってきた一人に過ぎない。たった今少し彼女の人生にスパイスが振りかけられたのだ。

しかし、彼女はこれ以降もまた平凡な人生を過ごし、平凡なまま彼女の世界を終えるのだろう。

まあ、この物語に平凡な死など、ありはしないのだが。

おっと、少し先走った話をしてしまったようだ。

言っておくが、彼女を主人公にする気も無い。

私がこれからお話しするのは、正に今血まみれになっている高校生とその周りのお話である。強気な顔をしているだけの平凡な通行人（このお話にもう関係することはないが、名は京子と言う。）はなにやら携帯電話でどこかに電話をかけている。

しばらくして、サイレンが響く。救急車が来た。

さあ、物語の始まりだ。

担架に乗せられ、救急車に運ばれている高校生の名は鷹山修也という。

先ほども言ったように、彼は旭が丘高校に通う生徒の一人である。

旭が丘高校の同級生はきっと彼の事故を聞いて心配している。彼は決して友達がいらないような陰気な男ではない。

過去はそれほど明るくないのだが、そんな過去を吹き飛ばすほど活発ではつらつとした男の子だ。

あの知らせを受けてからもう一週間が経った。

放課後は毎日病院に行って、修也に会いに行っている。会いに行くというよりは顔を見に行っているという方が正しいかもしれない。

修也はまだ目を覚まさない。それでも私は毎日一言は修也に言葉をかけた。

修也と私は、孤児院で共に育った。私はまだ何も分からない赤ん坊の頃に親を亡くしたから、孤児院にはかなり早い段階からお世話になっていた。

修也が孤児院に来たのは小学四年生の頃だった。

ある駐車場で車に轢かれそうになった修也を親が庇い背中を押した。修也は助かったけど、その車は修也の親の命を奪っていった。親の子どもを守ろうという気持ちが両親ともに起きたのだろう。二人とも修也を庇おうとしてこの世を去って行ったのだった。

そうしてやって来た修也とは同い年だったこともあってかすぐに仲良くなれた。それから中学二年生の夏に私が養子として現在のお義母さんに引き取られるまでは孤児院でよく一緒に遊んだものだった。その後も中高と同じ学校に通っている為に私たちは離ればなれにはならなかった。

だから、私にとって修也は特別な存在だった。孤児院には他にも仲良しはいたけれど、年齢も違うし、私や修也ほどの年齢で引き取り手のいない子なんてあまりいなかったから。

孤児院の頃の修也の顔が浮かび、私は早く修也に会いたくなった。

「紗枝、大丈夫？」友人の茜が心配そうに私の顔を見てくる。

「ああっ、うん、大丈夫だよー。」心配させまいと無理矢理元気に答えた。でも、茜には見透かされていた。というか、私と修也の仲の良さを知っている人なら、私が大丈夫なわけがないなんてことは、誰にでもわかるだろう。

「うそ。修也くん、まだ意識戻らないんでしょう？大丈夫なわけないよ。私も心配だなあ。」

茜もきっと修也に会いたいに違いない。修也はモテる。実際、茜は修也の事が好きらしかった。本人から言葉で聞いた訳ではないけれど、態度で分かる。

修也が事故で入院する一週間前のこと、つまり、今から二週間前、私と茜は修也とその友人の勇人さんと四人で富士特ハイランドに遊びに行ったのだけれど、その時の茜は本当に分かりやすかった。お化け屋敷で茜が何度も叫びながら修也に抱きついていたので。そしてその怖がり方は明らかに可愛く装っていたのだ。本当に怖いときは可愛らしくなんていられないんだ。それは私が証拠だ。

私は昔から怖い話やお化けが大の苦手だった。それは修也も知っていて、孤児院にいた頃、よく修也に怖い話を聞かされて一人でトイレに行けなくなったのを覚えている。修也にはその度に「トイレぐらい一人で行けよ。赤ちゃんかよ。」と笑われていた。

そんなエピソードまで知っている為に、お化け屋敷での私の驚き様を見るのを修也はたいそう楽しみにしていたようで、当日私が大きく口を開けて叫んだり、泣き出したりするのを見て、満足そうににやついていた。

茜はそんな修也を見てつまらなそうにしていたけど。
ああ、早く帰って来てよ、修也の馬鹿。馬鹿の修也。

果たして天罰なら何だって許されるものだろうか。

アメリカを襲った巨大ハリケーン。日本を襲った大地震。ボンベイを襲った大噴火。

作物の不作から来る大飢饉に、ペスト（黒死病）の大流行。

人口の減少に大きな影響を与えてきた災い。それが天罰だったとして、果たして天は許されるか。

天界の神は無罪放免なのか。

あの日、僕が齧った善悪と知恵を宿した禁断の果実。それ以来、僕は神を疑い始めたのだ。

それでも、決心は着かない。僕は神様の指示に従うのみだ。きっと正しい。これが正しいと神様の指示に従って馬鹿みたいに単純作業を繰り返す。

「アダム、この丘はもうこれで最後だよ。」

イブが最後の種を植える。どこか胸騒ぎがする。僕たちは正しい事をしているだろうか。

さて、再びこの世界に天命が響く。

「（よし、次はあの大海原に蒔くんだ。）」

僕たちは新しい世界を作っているだけなんだ。決して間違っていやしない。

自分に言い聞かせ、また作業に戻る。

イブはどう考えているだろうか。イブも同じ事を思っていやしないか。

この何にもない世界で二人、たった二人でこの責任を背負えるだろうか。

イブとは、禁断の果実を齧った直後に会った。

それまでずっと一人で天命を待ち、天命を受ければ作業をし、仕事を終わればまた天命を待つだけの僕にとって、イブは大切な話し相手であり、相棒だった。

僕が神様に逆らったのはその時が最初で最後。食べては行けないと言われていた禁断の果実をウーパールーパーに唆されて齧った時だけだった。

そうしたら、イブが現れたのだ。

二人で新しい世界を作ろう。そう僕が言った時、イブはもうずいぶん前からこうなることを知っていたかのように微笑みうなずいた。

僕らはこの海と大地しかない世界がどんな風になるのか、まるで想像が着かない。ゼロからイチを生み出すイメージの力は強大だ。

そう考えると、やっぱり神様はすごい。僕が一生懸命頭を使って考えるよりも、天命にただただ従うほうが世界は上手く出来上がるのだろう。

そんな事を考えているとイブは言ったのだ。

「失敗は成功の素だよ。ある程度は適当でいいのよ。」

僕はそれを聞いたときに喉奥から何か果実のはじける感覚がした。

そして、何だか知的になったように思えて、どんどん考えを進めて行ったのだ。

その結果、僕は神様を疑うようになった。彼女はどうかだろうか。

彼女は「失敗は成功のもと」と言ったけど、世界の創造主がそんなことでいいのだろうか。世界の創造に失敗は許されるのだろうか。

創造主すら失敗を許されるのだとしたら、天罰は許されないはずだ。

天罰は人類の大きな失敗を許さずに罰することに変わりない。

そもそも、人類の失敗はそれを創造した創造主と神様の失敗だ。天罰を下すということは創造主の失敗を肯定したことになる。それならば創造主を罰するべきだ。そこで人類に天罰を下すのは創造主の失敗を許し、どうにか辻褄を合わせる作業でしかない。つまり、天罰は創造主を許すことであり、にもかかわらず人類は許さずに天罰を下すというのは、矛盾ではないか。

いや、それは人の価値観によるのかもしれない。

僕はこのことについて考えれば考えるほど頭がいたくなり、結局一番単純な天命に従うことで落ち着く。

僕はイブとともに生きられるなら、もうそれでいいと思っている。

さて、その結果、世界はどうなるのか、君たちにはそれを見てもらわなければならない。

重い瞼をゆっくりと開く。視界が生まれたての赤ん坊のようにぼんやり霞む。徐々に視界を取り戻して行く。

見覚えのある顔。何か懐かしいその顔は母のように温かく、父のように心強く映った。紗枝だ。

「紗枝、ここはどこだ？」

紗枝は口を開けて何かを言い足そうにしている。しかし、その口から何か言葉を吐くこともなく走って部屋を出て行った。

「ん、何だよ。酷いな。」

周りを見渡すと、どうやらここは病院の一室のようだった。

僕は徐々に記憶を取り戻して行く。勇人の家から帰る際に夜道で何かにぶつかった所まで記憶はあった。

車に轢かれたんだらうな。と、そう気付いて、いきなり身体中が痛み出す。しかし、その痛みは車に轢かれたにしては弱かった。自分の身体の頑丈さに驚く。

そして、心の奥底で車に轢かれて亡くなった両親を思い出していた。

こんなことならあの時僕が轢かれていれば…。

時計を見る。短針と長針が5の方向を指しほぼ重なり合っている。

窓からは夕日が射している。夕方の五時だろう。丸一日寝ていたのだなと気付く。

紗枝のやつ、心配してくれたんだな。まあ、一日も寝てたら心配するよな。

そうこう考えているうちに、また睡魔が襲ってきた。

この睡魔は悪魔ではないが、ある種わざとらしく彼に襲いかかったのに相違ない。

それでは、一緒に彼の夢の中を覗き込もう。

悪夢がおしえてくれたこと

気付いたら僕は教室にいた。

授業始まりのチャイムが聞こえてくる。

僕はきっと夢を見ていたんだろう。どうしてあんな夢を見ただろうか。

友人の圭と勇人がニヤつきながら目で合図をしてくる。どうせ、また変なことを企んでいるんだろう。いつものように僕はそれに応えようと鞆から野球のボールを取り出し圭に投げた。

球は彼の身体を透き通った。

「へ？」思わず変な声が漏れる。

「おい、圭どうしたんだよ！」慌てて叫ぶが誰からも反応はない。すると、後ろから野球の球が飛んで来た。その球を圭は受け取り窓から外に投げた。それはいつもの光景だった。でもいつもは僕がその球を圭か勇人に渡していたのだ。

「おーい、みんなどうしたんだよ！」立ち上がって飛び跳ねる。だが、誰も気付くことはなかった。

「おい！」もう一度叫んだ次の瞬間のことだ。

教室に嵐のような強風が吹き荒れた。するとどうしたことだろう、保健の坂木先生の顔が赤く滲んだ。かと思うと、その顔が横に広がる。

いや、よく見ると違う。その顔は上下半分に千切れ教室の壁に飛び散ったのだ。胃から何かこみ上げてくる。今日は何を食べただろうか。思い出せなかったが、こんな状態で思い出したくはなかった。

生徒の悲鳴と嵐で空気が震える音が混ざりあって、教室内は悪夢と化していた。そうだ、きっと夢を見ているんだ。さっきの病院が夢ではなくて現実なんだ。そう思うしかなかった。

嵐は止まない。赤い嵐だ。気付くと先生は跡形もなく消えていた。それだけではない。圭も勇人もそこにはいなかった。ついに建物までもが切り刻まれ、崩壊して行く。嵐は色を増して行く。血の赤、コンクリートの灰色、肉片の茶褐色、白っぽいなにか。きっと骨だ。

もう辺り一面何が何だか見ても分からない。ありとあらゆる何かが気持ち悪いじゅくじゅくしたものになって広がっていた。トマトピューレを想像しただろうか。見た目はあっているが、色はもっと黒い。そしてところどころ白く濁っている。

恐らく、血と骨と肉片と髪の毛とコンクリートが混ざって、なんとも言えない奇妙な色を生み出した。全ての絵の具を混ぜた時にパレットに残る色を想像してみると良い。それは何とも表現がし難いが、間違いなく不快な色である。間違っても気持ちのいい色ではない。

全色混ぜた色は一体どこで使うだろうと昔考えたことがあったけれど、この景色を絵に残すとしたならば、今がその色の唯一の使いどころではないだろうか。

その絵の具を混ぜたトマトピューレだ。

もう駄目だ。胃から逆流してくる何かが口から溢れた。

「うぐあああ」ところが出たのは情けない声だけだった。その時だった。

「（しゅう…あ…）」

何やら僕を呼ぶ声がした。

「（どうし…の…だいじょ…ぶ？）」

直接耳に聞こえてくる訳ではない。頭に直接響く声だ。

この声は…、紗枝か。やっぱり、夢だったんだな。

現実に戻る直前、彼は唯一原型を留めて残った紅葉を発見する。しかし、それは即座に頭の片隅に消え、彼自身はその存在を認識したことすら気付いてないはずだ。

さて、彼はほっとしているが、まだ安堵するには早い。君たちももう気づき始めているのではないかな。

そう、これは単なる夢ではない。睡魔が彼に襲いかかったのはこの光景を見せる為だったと言っても過言ではないだろう。

しかし、当然ながら睡魔に意思はない。睡魔が時に悪魔になることは初めの方でお伝えしたが、それも睡魔は別に悪く無い。すべてはその睡魔が宿る人間側に原因があるのだ。睡魔はただ人間の持つ引力に引き寄せられるがままにその人間に入り込むだけなのである。

自身の引力に気付かず、つい客観視してしまった結果想像の産物として睡魔は生まれたに過ぎない。

修也は彼自身この夢を欲していたのだ。見なければならぬと強く感じていたのだ。ただし、それを修也は知るわけがない。言ってしまうおう、この後紗枝によって彼も知る事になるが、彼が意識不明になっていた期間は実に約一年。高校3年生だった彼や紗枝はもう高校を卒業している時期なのである。

その一年間、彼は意識を失っていたが、彼の内なる存在は一度も止まる事なく動いていたのだ。紗枝は意識不明の彼にこの事件のことを伝えていた。毎日、意識のない修也に一言声をかけ続けていた彼女はこの事件の後、一言どころかスピーチ原稿にして十枚分ぐらいになるであろうと思われるほど詳細にこの事件のことを彼に伝えていたのだ。

彼は意識の遠くでそれを受け取っていたのだ。そして、彼はそれを夢で再現したのだ。

さて、修也はついに目を覚ます。今度こそ本当の目覚めだ。

「修也、大丈夫？」

目を覚ますと紗枝が顔を覗き込んでいた。

「え？ああ、大丈夫。」心配させまいと笑顔で答える。辺りを見回すとやはり病室の中のようなだった。

「修也、トラックに轢かれたんだよ？ずっと意識不明で、私心配だった。もう目覚めないと思った。」紗枝の目から涙の粒が溢れ出す。

僕はやはり車に轢かれていた。上半身を起こし、紗枝の涙を手で拭う。それは温かくて、優しく、何だか懐かしい感じがした。

「心配かけちゃったな。ごめんな。ところで、俺どれくらい寝てたんだ？」

「ほんの数分。」うつむき泣いてた所を瞳で見上げる形になったために上目使いだった。可愛らしい上目遣いに照れて、目を反らしてしまう。

「いや、今じゃなくて。俺が意識失ってた期間だよ。」

「そんなのずっとだよ。丸一年間、修也はここで眠り続けてたんだ！」予想より長い間眠り続けていた事に耳を疑う。

「そんなに？それじゃあ、みんなは？もう卒業して、進学だの就職だのしてるのか？」

紗枝はうつむいたまま答えなかった。あまりに反応がないので、その静寂が永遠に続くようにも感じられた。

長かった。静寂は長く感じられた。しかし、実際は1分にも満たない。数秒の静寂だった。紗枝が沈黙を破った。

「いないよ。」今日の紗枝の回答は予想外のものばかりだった。いない？一体どういうことだ。

「みんな、もうこの世にはいないよ。旭が丘高校もろとも、もうないんだよ。」紗枝が再び泣き出した。僕はもう紗枝をどうにも抱きしめてやりたくなくなってたまらなくなった。でも、それは出来なかった。どうしてだろう。胸が苦しい。

その苦しさが恋のような美しい感情から生まれたものなのか、それとも胸に込み上げる違和感が生み出したものなのかはわからない。

その違和感が突如姿を変え、脳に信号を送る。それはさっき見た悪夢だった。

「もしかして、あの嵐…」紗枝が目を見開きこっちを見た。

「嵐？知ってるの？」嫌な予感がした。あの悪夢が実際に起きたなんて考えたくもなかった。

「さっき夢で見たんだ。教室に嵐が吹き荒れて…」また吐き気が襲ってくる。

「夢…。それでさっきうなされてたのね。」目を腫らした紗枝が僕の背中をさすってくる。それだけでずっと気分が落ち着いた。

「私は直接見たわけではないんだけどね。その時、たまたま授業を抜け出して、ここに来てたの。そしたら、お義母さんから電話が来て、あの事件を知ったの。」

「授業を抜け出してまで来てくれてたのか。ありがとう。」

「あの日は特別だったのよ。いつもは放課後に来てただけど、あの日は放課後用事があったって行けないはずだった。でも、私の嫌いな保健の授業があったし、抜け出しちゃって、それでここに来たんだ。」紗枝は少し赤面していた。

「あの事件はニュースで連日のようにやってたのよ。未だに原因は謎なんだ。鎌鼬（かまいたち）ってあるでしょ。気付いたら皮膚が切れてる現象。そこからとって、あの事件は鎌鼬事件と呼ばれてるみたい。」

鎌鼬事件。現実味のない響きが僕の見た悪夢、つまり、僕が意識不明に陥っている間に起きた、同じく現実味のない事件に相応しい名前にも感じた。

「生存者は」あの悪夢と本当に同じ事が起きたなら誰一人生き残ってないだろう。「いるのか？」

「いないよ。私だけ。おかげさまでマスコミが家に何度も押し寄せて来たわ。」

「大変だったな。」

「マスコミってさ、ネタに群がるハイエナみたい。人の気持ちなんておかまいなしに、色々な事聞いてくる。亡くなった友達の事とか。それで私が泣いたら、辛いよね、って同情した風に見せながら、内心ではおいしいネタを手に入れたぞって、にやついてるんだわ。それから、テレビにはしばらく私の泣いてる姿が何度も放送されて、嫌な事件だったね、って。こんなにもとんでもない事が起きたんだ、って深刻さをアピールするために。この事件は人類に対する天罰だ、私が起こした。とか言い出す宗教家も居たわ。今後もまた今回の様な鎌鼬が起きるだろう。だって。で、結局あれ以来一度も起きてないんだけどね。」紗枝はこの長い言葉を一息に吐き出した。相当のストレスを抱えていたのだろう。僕は「大変だったな。」なんて言わなければ良かったのに、と思った。それは同情した風に見せて内心でにやついているマスコミとさほど変わらないように思えたからだ。同情の言葉は大抵が自分の評価を考えての発言が多い。もしかしたら、自分もそうだったのではと考えてしまった。

そう考えていたら、もうなんにも言えなくなって、紗枝の事をひたすら見つめる事しか出来なかった。

しばらくして、医者が来た。

「鷹山さん、長い間寝てらしたために、身体がお堅くなっておありでしょう。リハビリも兼ねて、外を歩くと良い。身体の大きな怪我はもう君が意識を失っている間にとうに治っているよ。あとは身体を慣らすだけだ。」

「本当ですか、ありがとうございます。紗枝、外に出よう。」

このままこの空気のまま病室内で過ごすのも気がおっくうになって、僕は紗枝と外出することにした。